

# Syndrome Xの血管内エコーによる冠動脈硬化所見

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yoshio, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00065841">https://doi.org/10.24517/00065841</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# Syndrome Xの血管内エコーによる冠動脈硬化所見

Research Project

All

## Project/Area Number

08770491

## Research Category

Grant-in-Aid for Encouragement of Young Scientists (A)

## Allocation Type

Single-year Grants

## Research Field

Circulatory organs internal medicine

## Research Institution

Kanazawa University

## Principal Investigator

由雄 裕之 金沢大学, 医学部・附属病院, 助手 (10242546)

## Project Period (FY)

1996

## Project Status

Completed (Fiscal Year 1996)

## Budget Amount \*help

¥1,000,000 (Direct Cost: ¥1,000,000)

Fiscal Year 1996: ¥1,000,000 (Direct Cost: ¥1,000,000)

## Keywords

Syndrome X / 血管内エコー / 冠動脈硬化

## Research Abstract

Syndrome Xとは、典型的な運動誘発性の狭心痛を有し、心電図上も労作性狭心症と同様の変化を示すにもかかわらず、冠動脈造影上は異常を認めず、冠攣縮も否定された疾患群である。最近血管内エコー法が冠動脈に使用され、通常の冠動脈造影検査では正常と判断されてきた部分にも、内膜の肥厚やプラーク、石灰化などの動脈硬化所見が存在することが示されている。そこで、これまでは正常と判断していたSyndrome X患者の冠動脈に動脈硬化所見が存在するか否かの検討を行った。

平成9年2月現在まで、Syndrome X患者3例と、対照群として比較検討する予定の胸痛症候群患者3例が解析できた。血管内エコーにより、冠動脈造影上は正常と判断された両群いずれの冠動脈にも、内腔断面積で10%以下のきわめて軽い内膜肥厚の存在が確認された。得られた画像は録画し、後日デンシタイザーで内腔面積、狭窄度、病変部面積を定量的に評価した。その結果、Syndrome X患者の内膜肥厚の程度は対照群のそれと差がなく、動脈硬化の特徴的所見とされるアテロームプラーク、石灰化な

ども見られなかった。

現在の結果からは、Syndrome X患者の太い冠動脈(導管血管)には軽度の内膜肥厚は存在するものの、その程度はわずかであり、病因として有意なものであるとは判定できない。次年度も引き続き本研究を行い、さらに症例数を増やして検討する予定である。

## Report (1 results)

---

1996 Annual Research Report

**URL:** <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-08770491/>

Published: 1996-03-31 Modified: 2016-04-21